

1人でブラウントラウトを駆除してイワナを守ってみた  
長谷川功（水産資源研究所 さけます部門）

北海道千歳市にある千歳川水系紋別川は、鷹見ほか（2002）によって在来種イワナから外来種ブラウントラウトへの置換が報告された河川で、その後、2005年には演者によってイワナ単独域だった堰堤上流部へのブラウントラウトの分布域拡大が確認されている。この分布域拡大は、堰堤に穴が開いたために起きたのだが、2014年にその穴が礫の閉塞によって塞がった。そこで、演者は、2014年から堰堤上流部でブラウントラウトの駆除を毎年7月上旬と10月下旬に実施し、ブラウントラウトとイワナの個体数をモニタリングしてきた。

モニタリングでは、堰堤から約3km上流にかけての区間で電気漁具による捕獲を演者1人で行った。この区間は、川幅は5m前後で、水深1m程度の淵が所々にあるものの水深はだいたい膝下程度と河川規模は小さい。7月上旬は、採捕したブラウントラウトとイワナを当歳魚と1歳魚以上に分けて個体数を記録し、加えて10月上旬では、尾叉長と性判別（雌雄と未成熟）を行っている。性判別は、イワナでは腹部を押して排出する卵と精子を確認するのみであるが、ブラウントラウトは開腹も行う。なお、ブラウントラウトは遊漁対象として人気があり、関係者間の合意がないまま駆除を行い、社会問題となったこともある。ただし、本調査地はアプローチに入林届が必要で、その入林届はレジャー目的では受理されないため、遊漁者との軋轢は生じないと判断した。

イワナからブラウントラウトへの置換は、堰堤上流部でも確認され、2005年の個体数比は、モニタリング区間全体でイワナ：ブラウントラウトが9：1であったが、駆除開始時の2014年では1：9であった。駆除開始以降、ブラウントラウトの比率は徐々に低下し、2019年10月下旬ではイワナ：ブラウントラウト＝7：3までになったが、2020年7月上旬にはブラウントラウトが急増した。その要因として、遺伝分析により、過去に未検出のハプロタイプを持つブラウントラウトが確認されたため、密放流が強く疑われる。その後、2023年10月下旬に至るまで両種の比率は概ね1：1である。ブラウントラウトの平均尾叉長は、雄20cm、雌25cm程度であるが、30cmを超える大型個体は減少した。

総じて、本調査地程度の小規模河川ならば、1人での捕獲作業でも、ブラウントラウトの根絶はできないが、イワナ個体群が維持できる程度には、その影響を抑制できた。ブラウントラウト対策に悩む自治体や内水面漁協は、特に本州で多いが、本研究はブラウントラウト管理の1つのモデルケースとなるだろう。

なお、本研究の内容は2025年1月17日付けで *Aquatic Conservation: Marine and Freshwater Ecosystems* 誌にオープンアクセスとして掲載されている。

引用文献：鷹見ほか（2002）日本水産学会誌 68:24-28.